

上級日本語学習者による 形容詞中止形の使用状況

— 「YNU書き言葉コーパス」の調査を通じて

宮崎聡子

◆要旨

本稿では、上級日本語学習者の形容詞中止形の使用状況について、「YNU書き言葉コーパス」を調査対象とし、関係の意味及び作文タスクの種類の観点から分析を行った。学習者は日本語母語話者と同じように形容詞中止形を用いて多様な関係の意味の文を使用しており、形容詞述語に特徴的な用法も見られた。ク中止形とクテ中止形の使い分けは、作文タスクの種類のうち、読み手の親疎関係の違いと相関していた。学習者は読み手が「疎（目上）」である場合、ク中止形を多く用いておりふたつの形式を意識的に使い分けていた。しかし、母語話者の徹底した使い分けに比べるとかなりの差が見られた。

◆キーワード

上級日本語学習者、形容詞中止形、書き言葉コーパス、関係の意味、作文タスク

◆ABSTRACT

This paper investigates the actual use of non-finite forms of adjectives by advanced learners of Japanese, using “YNU corpus” while focusing on the semantic relations and the types of writing tasks. Learners use non-finite forms of adjectives in almost the same way as Japanese native speakers, and the characteristic usage of non-finite forms are found in their writings. Learners choose the *-ku* form or the *-kute* form according to the degree of intimacy of the relationship. Learners frequently use the *-ku* form when writing to superiors, which shows they consciously choose the *-ku* form or the *-kute* form. However they don't differentiate the two forms as clearly as native speakers.

◆KEY WORDS

advanced learners of Japanese, non-finite form of adjective, corpus of written Japanese, relational meaning, writing tasks

How Advanced Learners of Japanese
Manage the Use of Non-Finite Forms
of Adjectives
Analysis of the ‘YNU Corpus’
SATOKO MIYAZAKI

1 はじめに

文を中止する用言の形には、いわゆる「テ形」と「連用形」のふたつの形式(以下、両者を合わせて「中止形」と呼ぶ)がある。これらは、「～ので」や「～から」のように特定の関係的意味を明示するものではなく、次の例に見るように、前件と後件から読みとれる関係的意味はさまざまである。(1)は動詞、(2)は形容詞の例である。

- (1) a. 兄はジムに {行って/行き}、弟は釣りに行った。(並列)
b. 兄はジムに {行って/行き}、職場に向かった。(先行事態)
- (2) a. 父は {厳しくて/厳しく}、母は優しかった。(並列)
b. 父は {厳しくて/厳しく}、子供たちに怖がられていた。(原因)

従来、用言の中止形については、動詞を中心に多くの研究がなされてきたが、津留崎(2003a)では、中止形の表す関係的意味の全体像を明らかにするためには、動詞以外の品詞についても研究が必要であることを指摘し、形容詞中止形の関係的意味について詳細な分析を行っている。また津留崎(2003b)では、日本語教育においても、形容詞中止形には動詞と異なる特徴があるにもかかわらず、教材では特に配慮はなされていないことが指摘されている。一方で、学習者の形容詞中止形の使用実態については未だ明らかにはなっていない。

本稿では、「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」(金澤編2014、以下「YNU書き言葉コーパス」とする)を利用して、上級日本語学習者による形容詞のふたつの中止形の使用状況について、関係的意味や作文タスクの種類の観点から調査し、使用の傾向や特徴について考察する。

2 先行研究

従来、中止形の研究が動詞を中心に行われていた中で、「独立性の高いテ形・連用形」という観点から、品詞の枠を超えて文の構えについて論じているのが

白川(1990)である。そこでは、「ようだ」「らしい」などのモダリティを表す助動詞、「いい」「きびしい」などの「判断形容表現」、動詞「ある」などが、「独立性の高いテ形・連用形」を作りやすいとされている。これらはいずれも静的な述語である。そして、後続節は「一般論→具体的」「結論→根拠」「難解な表現→平易な表現」といった「前言の補足」の機能を果たす文が多いことが指摘されている。例えば、「この宗匠はなかなかきびしくて、連衆の差し出す付言をおいそれと採用しないし、ぶつくさ文句ばかり言ふ。」(丸谷オ一『低空飛行』)のような例がある(白川1990:236)。このような中止形の用法は、従来見過ごされがちであった。津留崎(2003a)では、小説の用例をデータとし、形容詞の中止形が文中でどのような関係的意味を表すのか、また形容詞の品詞性がそれとどのように関わっているのかについて、「時間的局在性」^[註1]の観点を取り入れ記述を行っている。そこでは、白川氏が指摘したタイプの文も、「前提」「注釈」といった関係的意味に組み込まれ、より包括的・体系的な分類が示されている。

日本語教育の観点からは、津留崎(2003b)が中止形の問題点を論じており、初級教科書における形容詞や述語名詞の中止形の扱いについて、「現状では動詞中止形の表す関係的意味にあてはまる用法のみが取り上げられている」(p.145)としている。例えば、「この公園は広くて新しい。」のような「並列」の例と、「このパソコンは、軽くて便利です。」のような「根拠」の例が区別なく並べられているため、誤用を生む可能性があることを指摘している。また中級以降についても、初級では扱われていない中止形の用法が文章中に現れている場合に、特に説明はないとしている。例えば、「招待状も、二人の気持ちを伝える大変いいもので、二人がにこにこしながら「来てくださいね」と言っているようだった。」(『テーマ別中級から学ぶ日本語』第2課)のような文の先行節は、後続節の印象を先にまとめて述べる「注釈」の用法として扱うべきだとする。津留崎氏はこのような現状について、学習者は「習うより慣れろで、経験によって理解していく」(p.151)ことになり、教師側の内省に頼った指導があることに問題提起をしている。そのほかに、日本語学習者による中止形使用についての調査研究としては、秋口・鄭(2002)がある。そこでは、ストーリー説明の作文において、日本語母語話者はテ形接続よりも連用中止形を多く用いるのに対し、初・中級レベルの学習者はテ形接続を用いる傾向があったことが報告

されている。ただ、品詞の別についての言及はない。また宮崎 (2015) は、本稿と同じ「YNU書き言葉コーパス」を対象に動詞の中止形の使用状況を調査し、上級日本語学習者がタスクによって二形式を使い分ける傾向があることを指摘している。

以上の先行研究の指摘から、形容詞を含めた静的な述語の中止形の研究は、日本語教育の観点からもさらに進める必要があると考える。

3 調査

3.1 調査概要

本研究の調査対象は、「YNU書き言葉コーパス」である。このコーパスは、横浜国立大学 (Yokohama National University) の留学生 (韓国語母語話者30名、中国語母語話者30名) と日本人大学生 (30名) を対象とし、場面や読み手の異なる12の作文タスクを課したもので、90名×12タスクの計1080編の作文がテキストファイル形式で収められている。留学生の日本語レベルは、大学の講義を受けることができ、一般的には上級と称されるレベルである^[注2]。またそれぞれの作文について一定の基準に基づき評価を行い、達成できたタスクの数に応じて、留学生を「上位群」「中位群」「下位群」の3つのグループに分けている。本稿ではこれを上級学習者の中でのさらなるレベル分けと捉え、適宜分析の観点として用いることとする。なお、以下では形容詞のふたつの中止形について、「大きく」を「ク中止形」、「大きくて」を「クテ中止形」と呼ぶ。

調査の目的は、①「関係の意味」と「形式 (ク中止形・クテ中止形)」の相関について、母語話者と学習者の傾向の違いを明らかにすること (→3.3.2)、②「タスクの種類」と「形式 (ク中止形・クテ中止形)」の相関について、母語話者と学習者の傾向の違いを明らかにすること (→3.3.3) の二点とする。

3.2 調査方法

調査方法としては、まず「YNU書き言葉コーパス」の全作文を対象に、UniDic (unicid-mecab) Ver.2.0.2により形態素解析を行い、非存在の「ない」を含

むイ形容詞の中止形 (肯定形) を抽出した。その際、情態副詞と認められる「速く走る」、結果状態を表す「大きく書く」のようなものは対象から外した。次に、津留崎 (2003a) の枠組みを参考にして、関係の意味の観点から用例の分類を行った。津留崎氏の研究を参考にした理由は、形容詞中止形の特徴となる関係の意味 (「前提」や「注釈」) の枠を設けていること、またク中止形・クテ中止形という二形式の違いについても分析対象にしていることによる。

3.3 調査結果

3.3.1 二形式の使用状況の概観

まず、表1で形容詞中止形の使用回数と使用率について、母語別に概観する。

表1 母語別・形式別使用回数と使用率

母語 \ 形式	ク中止形	クテ中止形	合計
日本語	53 (77%)	16 (23%)	69 (100%)
韓国語	37 (35%)	70 (65%)	107 (100%)
中国語	24 (29%)	58 (70%)	85 (100%)

日本語母語話者の8割近くがク中止形を用いているのに対し、学習者はいずれも3割程度にとどまり、クテ中止形の使用率が高くなっており、母語話者の割合と逆転している。カイ二乗検定の結果^[注3]、1%水準で有意差があり、残差分析では母語話者はク中止形の使用が、学習者はクテ中止形の使用が多かった ($\chi^2(2)=41.184, p<.01$)。これは、宮崎 (2015) で報告された、同コーパスにおける動詞の第1中止形 (形容詞ではク中止形) と第2中止形 (形容詞ではクテ中止形) の使用割合の結果と同様のものであった。

次に、学習者のグループ別の内訳について見てみる。

表2 グループ別・形式別使用回数と使用率

グループ \ 形式	ク中止形	クテ中止形	合計
上位群	29 (43%)	39 (57%)	68 (100%)
中位群	25 (42%)	35 (58%)	60 (100%)
下位群	7 (11%)	54 (89%)	61 (100%)

表2によると、下位群に比べて中・上位群ではク中止形の使用率が高くなっていることがわかる。カイ二乗検定の結果、1%水準で有意差が認められた($\chi^2(2) = 17.841, p < .01$)。残差分析では、上位群のク中止形使用が有意に多く、下位群のク中止形使用は有意に少なかった。このことから、形式の使い分けは日本語のレベルが反映されているといえる。

以上のように、学習者は母語話者に比べるとク中止形の使用が少ないが、レベルとは相関して上位群になると、その使用が多くなることがわかった。

3.3.2 関係の意味と形式との相関について

ここでは、関係の意味による形容詞中止形のふたつの形式の使用状況の違いについて見ていく。関係の意味の分類としては、津留崎(2003a)を参考に、「並列」「前提」「先行事態」「原因」「注釈・関係・評価」「副状態」の6つを設けた^[註4]。それぞれの特徴は以下のとおりである。例文は津留崎(2003a)による。

〈並列〉：先行節と後続節が意味的に独立し、対等な文。中止形述語と後続述語は、時間的局在性や評価性において同種となる。前後の順序を入れ換えが可能。クテ中止形とク中止形は交替可能。

- (3) 花子は優しくて明るい。
- (4) 花子は優しくて、雪子は明るい。

〈前提〉：先行節の事柄を前提として、さらに詳しい内容を後続節で述べる文。中止形述語と後続述語は、時間的局在性や評価性において同種となる。概要→詳細、全体→部分、状況→状況下の様子のような順序性がある。前後の順序を入れ換えるとやや不自然になる。ク中止形とクテ中止形は交替可能。

- (5) 父方はスーと鼻筋が通っているが、母方は丸くて小鼻が張っている。
- (6) ほとんど人影はなく、廃屋ばかりが並んでいる。

〈先行事態〉：先行・後続節において述べられるふたつのできごとが継起関係となる。形容詞中止形では、時の経過を表す状況語が示されている場合に限られる。前後の順序を入れ換えると不自然。ク中止形とクテ中止形は交替可能。

- (7) 戦時中からそういう傾向が著しく、敗戦後は加速度でこの年頃の人たちが変わっていった。

〈原因〉：先行節と後続節が因果関係をもつ。前後の順序の入れ換えは不可または不自然。ク中止形とクテ中止形は一部交替できない((8)のように反射的な生理反応の場合)。

- (8) 花子は痛くて声を上げた。(先行原因)
- (9) 花子は優しくて皆に人気がある。(条件)
- (10) このりんごは甘くておいしい。(根拠)

〈注釈・解説・評価〉^[註5]：先行節が、後続節で述べられる事柄に対する判断・解説・気持ちなどの語り手の心的態度を表している文。前後の順序を入れ換えると前件が根拠を表す。ク中止形とクテ中止形は交替可能。

- (11) 田中先生は厳しくて、忘れ物をするとすぐ廊下に立たせる。(注釈)
- (12) (焼夷弾は)サイダー瓶よりも長く50センチはあったという。(解説)
- (13) 花子はさすがに足が速くて、前の選手を次々と追い抜いた。(評価)

〈副状態〉：主体の主たる状態や動作が後続節の動詞述語で表され、それと同時に存在する主体の副次的な状態を先行節で述べる。運動と併存する主体の状態を表す点が、「速く(走る)」といった情態副詞が速さの側面にのみ言及しているのと異なる。前後の順序を入れ換えは不可。ク中止形のみ用法でクテ中止形への交替は不可。

(14) 花子は声もなく、立ちつくしている。

なお、学習者の用例中、例(15)のように関係の意味が明確でなく、判別できなかったものについては、「分類不可」の項目に入れた。

(15) 卒業したからずっとお会い機会がなく、お元気ですか。

(タスク5_C020中国下位群)

以下、結果について考察を行う。まず、表3で用法の分布を概観すると、日本語母語話者・学習者ともに全ての関係の意味で形容詞中止形が現れている。使用の割合が最も高いものから挙げると、母語話者・学習者とも「原因」→「並列」→「前提」の順になっている。

表3 母語・関係の意味別形容詞中止形の使用回数と使用率

母語	関係の意味	並列	前提	先行事態	原因	注釈・解説・評価	副状態	分類不可	合計
日本語		20 (29%)	10 (14%)	1 (77%)	30 (43%)	5 (77%)	3 (77%)	0 (0%)	69 (100%)
韓国語		25 (23%)	13 (12%)	5 (35%)	52 (49%)	10 (35%)	2 (35%)	0 (0%)	107 (100%)
中国語		29 (35%)	6 (7%)	1 (29%)	36 (44%)	4 (29%)	3 (29%)	3 (4%)	85 (100%)

津留崎 (2003a) では、「前提」「注釈・解説・評価」が形容詞述語に特徴的な用法とされている。初級で指導項目とはなっていないが、学習者にもこれらの用法での使用が見られた。次に挙げる例は、いずれも先行節で概要や判断が、後続節でその詳細や具体的な説明が述べられている。

(16) それから2008年まではほぼ横ばい状態に等しく販売台数はなかなか増えなかった。(タスク03_K009韓国上位群) (注釈・解説・評価)

(17) まず、地域全体を見ると、老人と若い夫婦の人数は非常に多く、地域全体の65%も占めています。(タスク6_C033中国上位群) (注釈・解説・評価)

(18) 韓国でのキムチは辛いほどうまいキムチであると認識されていること

が多く、その辛みとしては唐辛子を用います。

(タスク9_K026韓国上位群) (前提)

(19) 鍋の中身は特に、決まりはなく好きなものを好きなだけ鍋に入れて楽しめることができるので、具材選びもその人気の一つかも知れません。

(タスク9_C049中国下位群) (注釈・解説・評価)

「前提」「注釈・解説・評価」の用例数を学習者のグループ別に見ると、下位群よりも上位群に多く現れていたが、統計的な有意差は認められなかった。このような文が使えることは、上級者としての一つの特徴である可能性はあるが、初・中級レベルとの違いを見る必要がある。

次に、形式ごとの内訳を表4で見てみる。

表4 母語・形式・関係の意味別形容詞中止形の使用回数

母語	関係の意味	並列	前提	先行事態	原因	注釈・解説・評価	副状態	分類不可
		ク中止形	16 (1)	9	0	20	5	3
日本語	クテ中止形	4 (2)	1	1	10	0	0	0
	ク中止形	7 (0)	10	2	10	6	2	0
韓国語	クテ中止形	18 (8)	3	3	42	4	0	0
	ク中止形	7 (2)	3	1	5	4	3	0
中国語	クテ中止形	22 (8)	3	0	31	0	0	3

※並列の()内の数値は名詞修飾成分(「広くてきれいな部屋」)の用例数

まず、学習者について、文法的に使用が認められない箇所への用例の分布は、見られなかった。母語話者と学習者で二形式の現れ方に違いが見られたのは、「並列」と「原因」においてである。まず、「並列」において、母語話者はク中止形が多いのに対し、学習者はクテ中止形が多く、大きく差が出ている。カイ二乗検定の結果、1%水準で有意差が認められ、残差分析では母語話者のク中止形使用と学習者のクテ中止形使用が有意に多かった($\chi^2(2)=17.787, p<.01$)。その要因の一つとして考えられるのは、()内の数値で示したように、学習者は母語話者よりも「おとなしくて勤勉な好青年」のようなクテ中止形を用いた「名

詞修飾成分の並列」の用例が比較的多く見られたことである。学習者にとって人や物の特徴を表すのに使いやすい形式であることが窺える。次に、「原因」についても、母語話者はク中止形が多いのに対し、学習者はクテ中止形に使用が偏っていた。カイ二乗検定の結果、1%水準で有意差があり、残差分析では母語話者のク中止形使用と、学習者のクテ中止形使用が有意に多かった ($\chi^2(2) = 26.695, p < .01$)。小説を対象とした調査である津留崎 (2003a) では、「クテ中止形は《原因》の例が多い」(p26)とされているが、今回の母語話者の結果はその指摘とは異なっている。その要因としては、津留崎氏のデータには会話文が含まれていることと、本コーパスでは次の例 (20) (21) に見るように、目上に宛てて書く想定 of 作文にク中止形が多く用いられていることが考えられる。

- (20) 今回、レポートを書く際に『環境学入門』という本が必要なのですが、図書館にはなく、借りることができませんでした。(タスク1_J025日本語)
- (21) 私の故郷は自然がとて多く、都会の忙しさを忘れることができます。(タスク7_J029日本語)

最後に、「前提」や「注釈・解説・評価」については用例数が限られているが、母語話者・学習者ともにク中止形の使用への偏りが窺える。データ数を増やし、引き続き分析を行いたい。

以上、関係的意味と形式との相関について見てきた。学習者は、母語話者と同様にさまざまな関係的意味で形容詞中止形を用いており、形容詞中止形に特徴的な「前提」や「注釈」といったものも見られた。また二形式の使い分けについては、「並列」と「原因」においてクテ中止形の使用が母語話者よりも多い傾向が見られた。

3.3.3 タスクの種類と形式との相関について

「YNU書き言葉コーパス」の大きな特徴は、「書く」という言語活動を体系的に把握し、それを類型化した上でのタスクを設定していることである。その類型とは、①自分から書く「自発型」か、相手に頼まれそれに応じて書く「頼まれ型」か、②読み手が「特定(親疎関係の別を含む)」であるか「不特定」であるか、③やや短い文章の「依頼・説明・描写」(長さA)か、長い文章の「意見・手紙・物語」(長さB)か、というものである。表5は、12のタスクの内容と類型についてまとめたものである。本節では、このタスクの種類と形容詞中止形の二形式の使用の相関について述べる。一般に、「連用形(形容詞ク中止形)」は書き言葉的、「テ形(形容詞クテ中止形)」は話し言葉的であるといった違いがあることが知られている。結論から述べると、今回の調査では学習者による形式の使い分けは、「特定・親」「特定・疎」の違い、また「自発型」「頼まれ型」の違いと相関していることがわかった。

るか、③やや短い文章の「依頼・説明・描写」(長さA)か、長い文章の「意見・手紙・物語」(長さB)か、というものである。表5は、12のタスクの内容と類型についてまとめたものである。本節では、このタスクの種類と形容詞中止形の二形式の使用の相関について述べる。一般に、「連用形(形容詞ク中止形)」は書き言葉的、「テ形(形容詞クテ中止形)」は話し言葉的であるといった違いがあることが知られている。結論から述べると、今回の調査では学習者による形式の使い分けは、「特定・親」「特定・疎」の違い、また「自発型」「頼まれ型」の違いと相関していることがわかった。

表5 「YNU書き言葉コーパス」のタスクの内容と類型

タスク番号	内容	読み手	自発/頼まれ	長さ
1	メールで面識のない先生から図書を借りる	特定・疎	自発	A
4	メールで大学の学長に奨学金増額の必要性を訴える			B
7	先生に対して自分の故郷のお勧めの観光地や名物についてメールで伝える		頼まれ	A
10	先生からのメールに対して早期英語教育の是非について意見を述べる			B
2	メールで親しい友人から図書を借りる	特定・親	自発	A
5	入院中の後輩に励ましの手紙を書く			B
8	友人に起こったできごとを親しい第三者に報告する		頼まれ	A
11	友人からのメールに対して早期英語教育の是非について意見を述べる	B		
3	デジタルカメラの販売台数に関するグラフを説明する	不特定	自発	A
6	市民病院の閉鎖に対して反対の意見を新聞社に投書する			B
9	広報誌で料理の作り方を紹介する		頼まれ	A
12	小学生新聞の昔話コーナーで物語(七夕)を紹介する			B

まず、表6により、読み手の違いによる二形式の使用回数の違いを見る。

表6 「特定(親・疎)」「不特定」における形容詞中止形の母語別使用回数

母語	タスクの種類	特定・疎		特定・親		不特定	
		ク中止形	クテ中止形	ク中止形	クテ中止形	ク中止形	クテ中止形
日本語		24	1	1	10	25	5
韓国語		15	19	3	16	17	35
中国語		12	12	0	10	9	35

「特定・親」「特定・疎」の違いと、形式との相関について見てみると、いずれの母語話者についても、「特定・疎」の場合にク中止形を多く用いている。カイ二乗分析の結果、それぞれ有意差が確認された（日本語： $\chi^2(1)=23.250, p<.01$ 、韓国語： $\chi^2(1)=3.190, p<.05$ 、中国語： $\chi^2(1)=5.693, p<.05$ ）。「特定・親」「特定・疎」における中止形の使い分けは、日本語母語話者と学習者は似た傾向を示しているといえる。ただ、母語話者による「特定・疎」におけるクテ中止形の使用の低さは際だっており、母語話者は目上に対してはより改まり度の高いク中止形を積極的に用いていることがわかった。なお、「特定（親・疎の合計）」と「不特定」の間には、いずれの母語にも有意差はなかった。次に、「不特定」における二形式の使い分けについて見てみる。この「不特定」に含まれるタスクは、グラフ説明（レポート）、広報紙や新聞への投稿、昔話紹介といったものである。カイ二乗検定の結果、1%水準で有意差があり、残差分析では母語話者のク中止形が有意に多かった（ $\chi^2(2)=31.499, p<.01$ ）。中級以降の書き言葉の文体の指導において、いわゆる「テ形」ではなく「連用形」を使うことは項目として必ず取り上げられることであるが、調査結果からは学習者によるク中止形の使用は低く、母語話者との差があることが明らかになった。

次に、表7により、書き手が自分から書いた「自発型」か、依頼を受けて書いた「頼まれ型」という類別と形式との相関について見てみる。

表7 「自発型」「頼まれ型」における形容詞中止形の母語別使用回数

母語	自発型		頼まれ型	
	ク中止形	クテ中止形	ク中止形	クテ中止形
日本語	16	5	34	11
韓国語	25	27	10	43
中国語	11	13	10	44

カイ二乗検定の結果、日本語母語話者については、「自発型」か「頼まれ型」の違いは形式の使い分けに有意差はなかった（ $\chi^2(1)=0.064, n.s.$ ）。一方、学習者の場合はいずれも、「頼まれ」におけるクテ中止形の使用が多く、有意差が認められた（韓国語： $\chi^2(1)=8.806, p<.01$ 、中国語： $\chi^2(1)=4.989, p<.05$ ）。韓国語母語話者

についてはクテ中止形の使用数が増えた要因を示唆するデータがある。それは、自らが先生に依頼をする「図書貸し出し願い」の作文と、先生からの依頼に応えた「故郷の観光地紹介」の作文における二形式の使用数の違いである。前者では両形式を用いているにもかかわらず（ク6例、クテ6例）、後者では全てクテ中止形が選択されていた（ク0例、クテ8例）。母語話者の場合は両タスクで全てク中止形が用いられている。韓国語母語話者は同じ「先生」宛てであっても、「故郷について紹介を依頼されたこと」に関して、より親しみを表すためにクテ中止形の使用が多くなった可能性がある。今後、他の品詞の中止形も合わせて集計を行うと同時に、学習者のポライトネスの意識といわゆる「スタイルの切り替え」との関わりについて追跡調査が必要だと考える。

最後に、表8で文章の長さの違いによる形式別の使用回数について確認する。カイ二乗検定の結果、いずれの母語においても使い分けに有意差はなかった（日本語： $\chi^2(1)=0.321, n.s.$ 、韓国語： $\chi^2(1)=0.031, n.s.$ 、中国語： $\chi^2(1)=0.073, n.s.$ ）。よって、文章の長さは両中止形の使い分けに関与していない。

表8 「長さA」「長さB」における形容詞中止形の母語別使用回数

母語	長さA		長さB	
	ク中止形	クテ中止形	ク中止形	クテ中止形
日本語	28	7	22	9
韓国語	26	38	19	32
中国語	8	18	13	39

以上、タスクの種類と形式の使い分けについて観察した。学習者は、読み手の親疎関係により二形式を使い分けており、この点は母語話者の傾向と共通していた。一方で、「自発型」「頼まれ型」の違いについては学習者にのみ有意差が確認された。

3.3.4 学習者に見られた不自然な用例について

津留崎（2003b）では、誤用の可能性として「??このパソコンは便利で軽いです」（p.150）のように、根拠とその評価を述べる順序が逆になることが指摘さ

れていたが、今回の調査では確認されなかった。しかし、関係の意味が判断できない文、また、関係の意味は推測できるが日本語として不自然な用例がいくつか見られた。例えば、次のような例である。

(22) 毎日笑顔もなく泣いています。 (タスク 12_C026 中国下位群)

例 (22) は、「副状態」の用例と考えた場合、「毎日笑顔もなく泣いている」にすると許容されるだろう。しかし、事態をただ並列させているという可能性も考えられるため、学習者の使用意図について断定することはできない。また次のような例もあった。

(23) 一番年下の仙女は一番かわいくて、天宮に住んでいる仙人たちの着物を作るための布を織る仕事を担当していました。

(タスク 12_C0039 中国上位群)

例 (23) は、先行節で容姿の「特性」を述べ、後続節でどんな仕事をしているかという「習慣・活動」を述べており、時間的局在性・評価性において前後の述語が同種ではない。よって「並列」「前提」の特徴から外れている。また、「かわいい」ことと、「布を織る仕事を担当する」ことには関連性はないため、「原因」「注釈・解説・評価」としての解釈も成立しない。このような点で、(23) は不自然さを感じさせる文となっている。

以上のように、中止形を使って日本語として違和感なくふたつの事態を並べるとはそれほど単純なことではない。日本語母語話者が書いた文でも、「安易な使い方」により、読み手に負担をかけるものがあることが指摘されている^[註6] (高橋1960)。原因用法に関しては、「*暑くて、窓を開けてください。」のような例を用い、後件のモダリティ制限について積極的な指導が行われているが、単純に「並列」させているような例については、見過ごされることが多いように思われる。不自然さを感じさせる例について丁寧に観察していく必要がある。

4 まとめ

本稿では、上級日本語学習者の形容詞中止形の使用状況について、「YNU 書き言葉コーパス」を調査対象とし、関係の意味及び作文タスクの種類の観点から分析を行った。その結果、どのような関係の意味で使用しているかについては、上級日本語学習者と母語話者の使用率に大きな違いは見られなかった。また、学習者の用例には、初級で指導項目とはなっていない「前提」「注釈・解説・評価」といった形容詞述語に特徴的なものも観察された。タスクの種類と形式の使い分けについては、母語話者・学習者ともに相関が認められた。学習者は、読み手が「親(友人)」か「疎(目上)」かによって形式を使い分けており、意識されていることがわかったが、母語話者の使い分けはさらに徹底されており差が見られた。

今回の調査結果は、母語話者と学習者の言語使用の傾向について記述したものであるが、「学習者はできるだけ母語話者の使用に近づけるべきだ」と主張するものではない。ただ、読み手を意識した場合に現れる母語話者の特徴、また非母語話者との比較といった基礎的なデータを、教師が把握しておくことや学習者自身にその情報を提供することは、意味のあることだと考える。

今後は、今回明らかにできなかった「関係の意味」と「タスクの内容」との相関について調査・分析を行い、母語の種類やレベルの範囲を拡大しながら、最終的に否定形も含めた動詞・形容詞・述語名詞の中止形について、どのような文法シラバスやライティング指導に組み込んでいくべきか提言ができるよう、考察を続けたい。

〈岡山大学大学院生〉

付記

本稿は、2015年9月27日に学習院女子大学で行われた、第7回日本語／日本語教育研究会において口頭発表した内容に加筆修正を加えたものである。発表に際し貴重なご意見をくださった方々に御礼申し上げます。

注

- [注1] …… 文の表す対象的な内容を、時間軸上に局在するか否かの特徴から「運動（動作・変化）・状態・一時的存在・恒常的存在・特性・関係・質」に分けるとしている。
- [注2] …… 調査対象の留学生60名のうち、7割の44名が1級（N1含む）合格者である。
- [注3] …… js-STAR (<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm>) を利用。
- [注4] …… 中俣（2015）では、並列表現の体系の中で、「て形」「連用形」について12の意味関係のタグ（「同形式」「同構造」「同評価」「理由」「対比」「例示」「一般化」「精緻化」「付加」「細分化」「代替」「無」）により詳細な分析をしている。本稿の分類の範囲では「並列」「前提」「注釈・解説・評価」と重なる。
- [注5] …… 津留崎氏は「注釈」「解説」「評価」を別項目としているが、「陳述成文に近づく」ものとしては同じグループとして扱っている。本稿では一つの項目とした。
- [注6] …… 例えば、「あれ肌は小ジワ、シミ、タルミ、ヒフの老化の原因になり、お化粧乗りが悪く、あれ肌は、油断できません。（新聞広告）」(p.106) などがある。

参考文献

- 秋口まどか・鄭賢熙（2002）「初級・中級の日本語学習者の文章表現について—中国人留学生・韓国人留学生の事例」『新潟大学留学生センター紀要』5, pp.51-59.
- 白川博之（1990）「独立性の高いテ形・連用形」『広島大学教育学部紀要』2(38), pp.235-244.
- 高橋太郎（1960）「文の途中での切り方」岩淵悦太郎（編著）『第三版 悪文』pp.95-115. 日本評論社
- 津留崎由紀子（2003a）「形容詞の中止形を用いた複文における先行句節と後続句節の関係」『日本語科学』13, pp.7-32. 国書刊行会
- 津留崎由紀子（2003b）「日本語教育における中止形の指導と日本語研究」『国文学解釈と鑑賞』68(7), pp.144-152. 至文堂
- 中俣尚己（2015）『日本語並列表現の体系』ひつじ書房
- 宮崎聡子（2015）「日本語母語話者及び日本語学習者による動詞中止形の使用状況—「YNU書き言葉コーパス」の調査を通じて」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』39, pp.179-194.

調査資料

- YNU書き言葉コーパス（金澤裕之（編）（2014）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房）